

# 心理学 ミュージアム

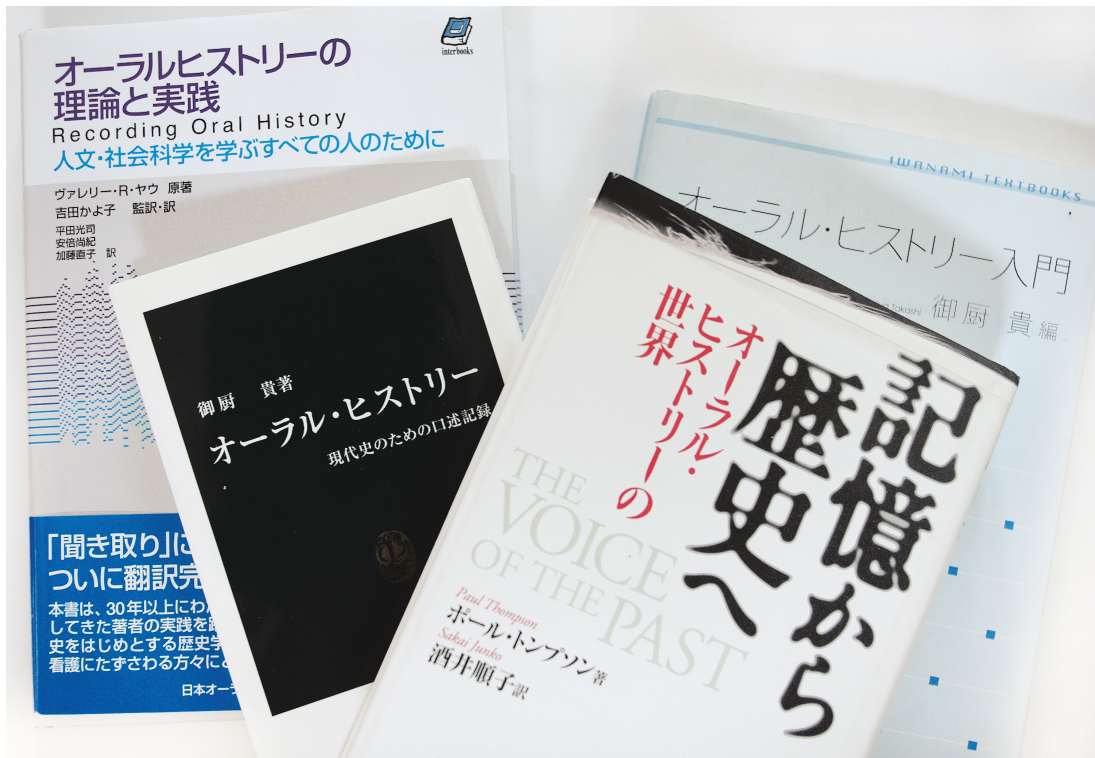


横浜国立大学教育人間科学部 准教授  
**鈴木朋子**

Profile—すずき ともこ

2004年、横浜国立大学大学院工学研究科修了。博士（学術）。関西医科大学精神神経科学講座助手を経て、2009年より現職。専門は臨床心理学、心理学史。著書は『心理学史』（共著、学文社）、『精神分析的心理療法を学ぶ：発達理論の観点から』（共訳、金剛出版）など。

## 歴史を聴く



オーラル・ヒストリーを主題にした本

歴史研究の方法のひとつに、オーラル・ヒストリーと呼ばれる形式がある。日本語に訳すと、口述史。人に直接歴史を語ってもらい、その口述史料をもとに歴史を描き出す方法である。

オーラル・ヒストリーという用語が使われるようになったのは近年になってからだが、昔の出来事を年長者や識者から教えてもらうという方法（口伝）は、古くから世界各地に存在した。研究法としてのオーラル・ヒストリーが発展したのは、地域史や労働史といった社会学の分野とされている。世界で最初の組織的なオーラル・ヒストリーは、コロンビア大学で行われた。1948年に設立された同大学のオーラル・ヒストリー・リサーチ・オフィスでは、現在8,000件以上の記録がアーカイブスとして保存され公開されている。日本では、1960年代から政治史の分野でオーラル・ヒストリーが行われるようになったが、さまざまな研究分野で用いられる方法となったのは、ここ20年ほどのことである。2003年には、日本オーラル・ヒストリー学会が設立され、雑誌『日本オーラル・ヒストリー研究』が発行された。左頁の写真は、現在入手可能な、オーラル・ヒストリー関連の書籍である。2000年代に入ってからようやく、日本でもオーラル・ヒストリーの方法が市民権を獲得しつつある。

オーラル・ヒストリーのためのインタビューを依頼すると、インタビューイから、必ずといっていいほど投げかけられる疑問がある。インタビューイの記憶に間違いがあったらどうするか、個人的な話で役に立つのかといった疑問で、要は、口述史料は客観性に欠けるのではないかという意見である。確かに、どんなインタビューイであっても忘れてしまうことはあるだろうし、話さず伏せておきたいこともあるだろう。また、インタビューアの質問の仕方や、インタビューアがどんな人物であるかによっても、インタビューイが語る話は異なるだろう。そう考えると、口述史料は非常に主観的で穴だらけのデータということになる。しかし口述史料に対して、文章化された史料が客観的かということ、必ずしもそうではない。文章は、書く目的によって、筆者によって、主観的に解釈された歴史が印刷されているわけで、場合によっては口述史料以上に歪みを持つデータである可能性もある。それならば誰も話さず書かずにいればよいかというと、それは歴史を闇に葬るという最悪の結果になる。オーラル・ヒストリーの口述史料は、同時代の文献などと照合されて、歴史の一部となっていくのが一般的である。インタビューイが話すことは何でも、インタビューアや後世の研究者にとっては、二度と得られない大切なデータとなる。むしろ、インタビューアが当たり前で些細なことと感ずること、個人的な感情にすぎないと思うことのほうが、文章には表れない、生身の人間が体験した時代の息吹を伝えるのに役立つことが多い。

さて、心理学のオーラル・ヒストリーは、いつから行われているのだろうか。アメリカ心理学会（APA）では1980年代からAPA会長のオーラル・ヒストリーが開始された。日本心理学会では、2012年に資料保存小委員会が教育研究委員会の中に設置され、同学会名誉会員を中心とした心理学者オーラル・ヒストリーが企画されて現在までに約20名の心理学者のインタビューが行われた。インタビュー内容は、心理学者としての研究や学会活動などの仕事のほか、インタビューイが心理学を学んだ経緯や、受けた心理学教育や仲間との交流である。筆者もインタビューアの一人として参加しているが、多くのインタビューイに会えば会うほど、インタビューイの語る時代の出来事が立体的に見えるように感じる。例えば、第二次世界大戦直後の学問への飢えや、1960年代末の大学紛争への対応などは、複数のインタビューイが語る体験である。インタビューイの話の中には、文章を読むだけでは得られない、生き生きとした体験に基づく心理学の歴史が存在しているのである。

## 参 考

コロンビア大学オーラル・ヒストリー・アーカイブスについては、<http://library.columbia.edu/locations/ccoh.html> を参照。